

《書評》

竹内瑞穂 『変態』 という文化——近代日本の〈小さな革命〉

水川 敬章

本書は、著者の博士論文に加筆修正を加えて上梓されたものである。著者にとっては、初めての単著の書籍となる。各章の内容紹介と検討は研究内容がより近い書評者に譲り、ここでは門外漢が本書をめぐって考えたことのごく一部を紙幅のゆるす限り述べることで、本書の知的営為を紹介する試みとしたい。

はじめに、本書の内容を概観しておこう。対象となる時代は、一九一〇年前後からエロ・グロ・ナンセンスが隆盛する一九三〇年代までである。その中で、「変態」概念とその理論の登場を捉え、それらが如何に文化的現象の中で流通し消費されていったのが検証され、更には、その消費が保持する政治性が明らかにされる。その政治性のひとつとして、「変態」と自称した者たちや「変態」に関わった者たち——即ち、逸脱者たちの主体構築と共同体形成をめぐる力学が論じられる。分析対象となるのは、雑誌や小説あるいは宗教に関する言論など様々であり、章毎に分析対象の質が異なっているようにも読まれるが、分析としては、文化に関する諸言説の編成を分析している点で一貫している。そして、問題の「変態」である。著者曰く、この概念は「逸脱者をめぐる近代的知のごった煮」（一四頁）である。この表現がにおわせるとおり、本書の議論は所謂性的マイノリティ論やクイア研究というよりも、生政治や生権力、あるいは消費など様々な理論的術語で照射されてきた日本近代の力学を「変態」という角度から問い直す試みだと判断する方が穏当であろう。

このように概観したとき、本書が如何なる学問領域の成果であるのかを言い当てることは容易ではない。著者のキャリアに鑑みれば、日本近代文学がその領域に当てはまる。確かに、アニメやポーカーロイドまでを対象にした昨今の日本近代文学研究の「逸脱」ぶりはなかなかのものであるが、作家・作品、あるいは文学に関わる何事かではなく、「変態」という日本近代における文化現象をその分析対象とする本書もまた、研究領域の「逸脱」の実践のひとつと述べて差し支えない（実際、「あとがき」で著者は自身の研究キャリアを「超域的」と述べている）。また、本書が好敵手と見做すのが、故ミリアム・シルババークのエロ・グロ・ナンセンス研究であることから理解されるように、研究の眼差しはドメスティックな日本近代文学研究ではなく、国際的な日本研究の水準を見据えている。

このように新進気鋭のダイナミックさ溢れる本書であるが、その論述スタイルは、理論を過剰に振り回すこともなく、冷静で客観的で学術的に端正である。この端正さが如実に表れているのが、「第1章 変態性欲論と変態心理学——大正期「変態」概念の成立——」である。本章では、「変態」概念の登場と成立が、科学的知と通俗的知の両方の言説編成を丁寧に整理する中で明らかにされる。このような議論はターミノロジという形で文学研究においても可能であり、したがって日本近代文学研究として端正だとも言える。しかし、本章の初出は、「文学」ではなく、「心理学史」の学術誌である。この事実が意味するのは、本章の論述の適切さが、（文学研究よりも）科学的な領域に属する心理学史によって保証されている点である。本章の論述の端正さとは、この心理学史という学知のマナーに則ることで獲得されたものである。ここから、ひとつの学問分野に集束することのない（言い換えれば、内弁慶の学際性ではない）端正さが看取される。

そして、端正さに関わって次に注目したいのは、計量的な分析、平易に言えば〈数え上げることとそれを図表化すること〉という分析方法が採用されている点である。これは「第3章 「民衆」からの〈逸脱〉——「変態」概念および天才論の流行と文壇人——」や「第7章 主体化を希求する〈逸脱者〉たち——男性同性愛者たちの雑誌投書——」など複数の章で駆使されている。例示すれば、「第2章 「変態」に懸ける——『変態心理』読者とそのモチベーション——」では、

雑誌『変態心理』の投稿者たちの「変態心理の研究に興味を持った動機」が分析シートによって一覽となって可視化され、「寄稿読者」の所在地・職業・学歴もまた図表化される。また、「第9章 左翼・エログロ・ジャーナリズム——『新愛知』におけるプロレタリア文学評論とモダニズム——」では、雑誌『新愛知』の文芸評論についての計量的な分析が行われ、それを元手にエロ・グロ・ナンセンスとプロレタリア文学評論との絡み合いが、地方都市名古屋の近代の問題として議論される。例示した二章とも雑誌媒体の分析であるが、媒体の物質性にこだわる書誌研究でも、図像等の表象分析でも、単純な読者反応論でもない、客観的なデータ分析を強く意識した研究が行われている。

これら本書の特徴は、人文学という比較的大きな枠組みにおいては確かに端正である。しかし、こと日本近代文学研究という領域に転じてみれば、それは先鋭的なものになる。例示した二章の論述／分析方法を煎じ詰めれば、前者は心理学的であり後者は社会科学であると述べることができる。その意味で、書誌に心を砕き、丁寧な注釈を施しながら文の彩を論じる日本近代文学の王道的研究からすれば、本書の論述は実に奇妙クワイアであり「逸脱」的である。

以上のように本書の特徴を記述するならば、浮かび上がるのは、本書が日本近代文学研究を「逸脱」する先鋭さを保持しつつ、日本近代文学研究を含めた人文学的なレベルにおいて端正な研究であるという、先鋭さと端正さの融合である。

しかし、本書が「逸脱」的とはいえ、文学を蔑ろにしているわけではない。先に述べた「第3章」では文壇人が、「第9章」では、文芸評論が主たる分析対象であるし、「第5章 共同体への憧憬——小山内薫の芸術観と大本教信仰——」や「第6章 欲望される〈天才〉——「変態」概念による批評と有島武郎の〈偶像〉化——」では、作品こそ議論の中心に据えられないが日本近代文学の顔役作家に焦点が当たる。そして、「第4章 「変態」の「流動」——谷崎潤一郎「鮫人」の逸脱者たち——」では、「変態」概念の同時代的文脈の中で小説が読み解かれ、「第10章 プロレタリア文学の〈臨界〉へ——井東憲『上海夜話』におけるプロレタリア探偵小説の試み——」では、「混血児」の表現の分析などに基づき、「変態」と深く関わった井東の小説が論じられている。したがって、本書は文学研究という領域とも確かな紐帯を持っている。

このように絶妙のバランス感覚を持つ本書にも、野暮な無いものねだりをしたくなる部分はある。ひとつは理論についてである。本書の理論的枠組みは、ミシェル・フーコーの議論に依拠している。もちろん、その他のセクシュアリティに関する諸理論も踏まえられており、特に「第7章」でのジュディス・バトラーの「受苦」に関する議論の参照は、近代文学研究という角度からみれば、ほぼ参照されることのない部分であり興味深い。しかし、ドミナントであるのはフーコーの権力論と、彼の捉える「抵抗」の理論である。この見立てから、日本近代の時空間の中で埋没し忘却された逸脱者たちの「生」を描き出すことは意義深い。その一方で、本書には同じくフーコーの理論である「パレーシア」も組み込むことができたのではないかと思う。無論、著者には釈迦に説法であろうが、「告白」の問題とも関わるこの理論は、大小様々の「知識人」たちが、ときに自らを「変態」や「逸脱」者と告白しながらリードした「小さな革命」≡抵抗の様態を更に複雑に描き出す分析を可能にするはずである。また、キーワードについて、「変態」よりも「逸脱」がやはり最前面にあるべきではないかと考えられる。筆者はこれも織り込み済みで、「序章」において「逸脱」（逸脱者）が漠然とした主題に過ぎることを述べ、「変態」という限定を設けたと述べる（二四頁）。しかし、「第9章」「第10章」のプロレタリア文学や国民国家（本書では「民族国家」）の議論は、「変態」よりも「逸脱」という視角が可能にしたものではなからうか。色々と野暮なことを書いてしまったが、本書が先鋭的で端正であることはやはり揺るぎない。本書には「消費」、「地域」、「知識人」などまだまだ触れるべき点があるが、もうすぐ紙幅が尽きる。また別の機会に、これらの点を検討することができる幸いである。日本近代文学研究における新世代の成果のひとつとして本書が広く読まれ、そこから新しく刺激的な議論が練り上げられることに期待を寄せたい。

〔二〇一四年三月一四日発行　ひつじ書房刊　A5判　三三四頁　五六〇〇円＋税〕

（愛知教育大学助教）